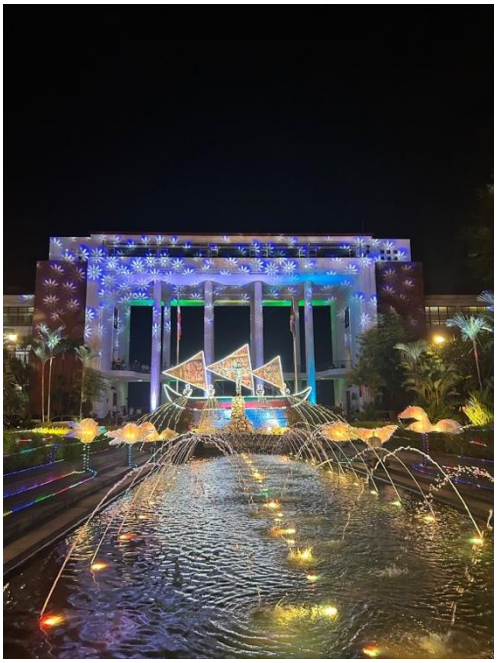
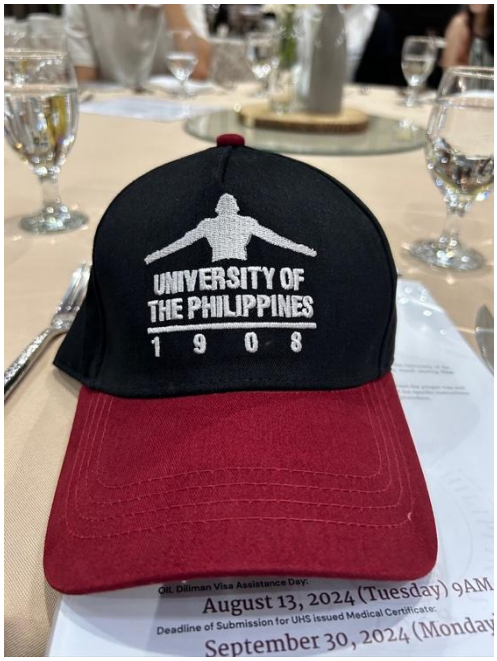
フィリピン大学ディリマン校

交換留学報告書

静岡県立大学国際関係学部国際関係学科３年





総合的な感想

私は、３年後期の１学期間をフィリピン大学ディリマン校の交換留学生として過ごした。フィリピンでの５ヶ月間の滞在は私にとって貴重で充実した日々を提供してくれたと同時に忘れない思い出となった。私はこれまで語学留学やスタディーツアー、サークルでの出張など様々な理由で海外に渡航してきたが、５ヶ月という期間は初めてであり、当初は不安と焦りに押しつぶされそうな日々だった。しかし、交換留学を終えて振り返ると、不安や焦りといったマイナスの感情は時が経つにつれて薄れ、楽しさや充実感といったプラスの要素がそれに代わった。フィリピンでの生活を通じて新たな自分を発見し、多くの学びを得ることができた。

フィリピンは貧富の差が激しいという現状を知ってはいたが、現地での生活を通してその深刻さを想像以上に実感した。肌で感じるその現状は「当たり前」という概念について改めて考えさせるきっかけとなった。また、海外で生活したことで自分の長所短所がはっきりし、新しいことに挑戦する自信をつけることができた。フィリピンでの生活や留学生として海外の大学で現地学生と一緒に授業を受けたという経験は今後の人生の糧になるだろう。そう思わせて

くれる留学生活であった。

派遣先大学について

　フィリピン大学ディリマン校はフィリピンの中でトップクラスの大学である。学生のレベルは高く、講義内容も学生主体の授業が多かった。私は、英語、地域開発、食品栄養科学、体育のクラスを受講した。英語のクラスはライティングに特化した講義であり、論文の読み方から書き方まで教わり、期末レポートでは興味のあるトピックについて 1500 語以上での提出が必須であった。地域開発の講義では、貧困の原因について考え、貧困改善に向けたアプローチに焦点を当てた講義であった。また、課外活動として地方のコミュニティに訪れ、フィールドワークを行うなど実践を含めた講義だった。食品栄養科学の講義では、食事が私たちの健康にどれほど影響を与えているのかについて考える授業であり、後半では栄養を考慮したヨーグルトを作るなど実践的な講義であった。体育の授業ではスキューバダイビングの講義を受講した。フィリピン大学は体育の授業が豊富であり、スポーツ全般に加えて、ウォーキングや民族ダンスの授業などがある。スキューバダイビングの講義ではライセンスが取得可能であったため合宿に参加して無事ライセンスを取得することができた。フィリピン大学は一つの科目が週 2 回あるため一回一回の授業内容が濃く、授業スピードは早い。また、日本の大学と比較すると、ディスカッションやグル

ープワーク、プレゼンテーションが重視されており、学生が主体的に授業を進める傾向が強く、学生が積極的に学ぶ環境がつくられていると感じた。授業は基本的には英語で行われるが、時折フィリピン語が混ざる場合があった。授業内容を理解するのは大変であり、課題も毎授業出されるため、困難であったが、教授や学生に分からないことを尋ねると快く教えてくれサポートしてくれた。学生の多くがフレンドリーで、カフェで一緒に課題をやったり、ショッピングモールに遊びに行ったり、バスケやサッカーの試合を観戦したりと充実したキャンパスライフを送ることができた。

生活面について

滞在先は International Center という新しく改装されたキャンパス内の寮に住んでいた。寮は 5 人一部屋だったが、新しくできたこともあり、清潔で設備も整っていた。貧富の差が激しく地域によっては治安が悪いところがあるかもしれないが、私個人の感想としてはそこまで危険ではなく、気をつけていれば何事もなく楽しいフィリピン生活を送れると思う。食事や交通状況、文化など、日本と違うところは多々あるが、自分を成長させてくれる良い機会であったと私は捉えている。価値観が広がるとともに自分自身について考えることができた。

交換留学生としてフィリピンで生活した時間は私の人生においてかけがいのない時間であった。留学中は思うようにいかないことや、想定外の出来事が多々あった。その時は友人と助け合い、励まし合い、乗り越えてきた。海外で生活し、異なる国籍や文化を持つ人々と交流し、同じ目的を持つ仲間たちとキャンパスライフを送る日々は非常に刺激的であった。長いようで短かった５ヶ月は新たな私を発見させてくれ、これからの人生において重要な時間になっただろう。

交換留学に限らず、海外に行くことは、自分の知らない世界を知る機会を与えてくれると同時に、日本の良い点や悪い点を改めて認識させてくれる。少しでも海外に興味があるのであれば、その好奇心に従い、旅に出ることを強く勧めたい。

フィリピン大学ディリマン校

交換留学報告書

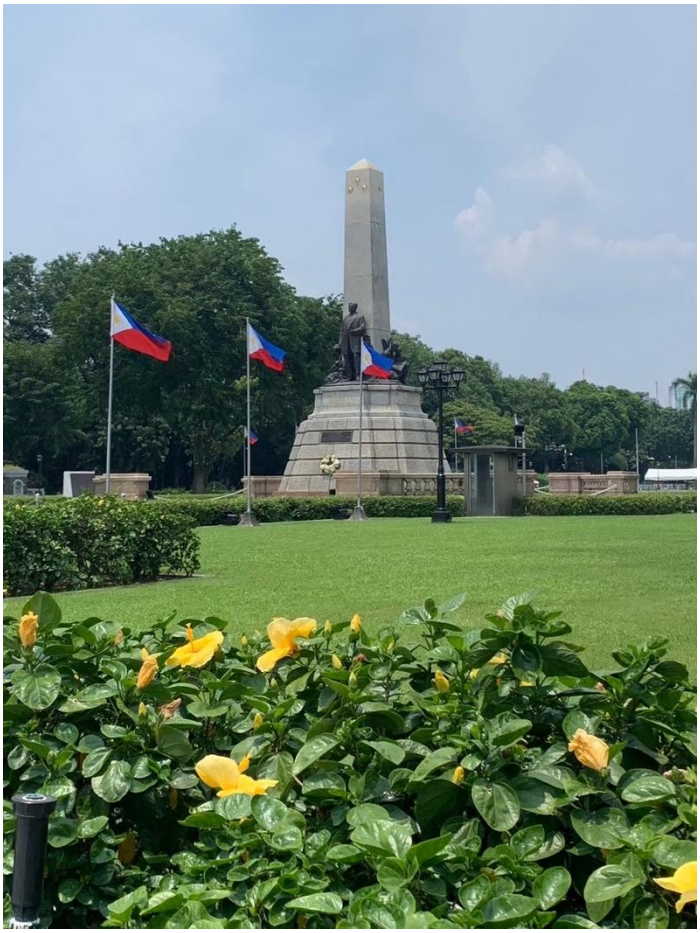


写真 1*

国際関係学部　国際関係学科 4 年

目次

1. 派遣先の大学について
2. 生活面について
3. その他（フィールドワーク）
4. これから留学を考えている方へ
5. 最後に

1. 派遣先の大学について

派遣先のフィリピン大学ディリマン校は、マニラ首都圏のケソン市ディリマンに位置している。この地区の中心にはケソンメモリアルサークルと記念碑がある。周辺には税務署や環境省などの政府機関や医療施設が集まる行政・医療の中心地となっている。また、住宅地には学生向けの貸し部屋が多く、フィリピン大学に通う多くの学生を支えている。

私は交換留学生として、一般教養科目から「フィリピンアーツ」「東南アジア交易」「ビジネス英語」の 3 つ授業を選択した。「フィリピンアーツ」を通じてフィリピンの文化やアイデンティティを深く知ることができた。マニラ観光を行った際にはフィリピン独立運動の象徴的な存在となったホセ・リサール像やアンドレス・ボニファシオ像などが街中で見る機会もあったのでフィリピーノにとって身近な存在だと肌で感じた。「東南アジア交易」では東南アジア地域間の経済関係や地理的特徴について学んだ。また、「ビジネス英語」の授業では、ディスカッションや面接準備を通して実践的なスキルを身につけることができた。それぞれの授業でディスカッションやグループ

ワークが必須のため積極的に参加するようにした。心優しい学生たちは授業内容が聞き取れなかった際に、何度も言い換えてくれたのでとても助かった。多くの生徒と意見を交わすことで、新しい視点を得られたことが新鮮だった。

写真 2**

2. 生活面について

私は留学期間中の 5 ヶ月間を大学の敷地内にある国際寮で過ごした。ルームメイトは 4 人で、そのうち日本人 3 人、1 人インドネシア人である。国際寮は 2024 年 8 月からリフォームされ、新しく入れるようになった寮だと聞いていた。初めての留学であり英語を学べる環境を楽しみにしていた反面、日本人の子が一緒の寮にいてくれたことは心強かった。寮の設備は、渡航前に聞いていた状況とは違っていた。通信環境があまり良くないので、オンライン授業の際にはベランダでグループワークを行っていた。

大学の敷地内をジープニーが走っており、毎朝利用して通学していた。他にも観光やショッピング、日常生活を通してフィリピンならではの文化に触れることができた。最初は戸惑うことも多かったが、徐々に慣れてくるとその魅力を楽しめるようになった。2023 年にフィリピン大学から交換留学で県大に来ていた子と、フィリピンで再会できたのは本当に喜ばしいことだった。大学を散歩したり、履修登録の相談に乗

ってくれたりと安心して過ごすことができた。

3. その他（フィールドワーク）

卒業論文は地域資源を生かした都市農園のあり方について調査することを目的にした。特に、フィリピンでは貧困層が多く、国全体の発展が遅れている現状がある。そのため都市農園がストリートチルドレンや貧しい人々に食料を提供する可能性を持つのかに注目した。テーマ選定のきっかけは、日本でコミュニティガーデンに参加した経験にある。フィールドワークでは、現地調査を中心に活動を行った。具体的には、ビザヤや BGC にある都市農園を訪問し、運営者へのインタビューを実施した。また、農園で栽培されている作物を観察し、イベントにも参加した。この過程で運営する人々と協力し、必要に応じてフィリピーノの人々にメールの確認を依頼するなど、現地の人々との交流を通じて調査を進めた。

しかし、フィールドワークで得られたデータや知見を卒業論文に加えることは最終的にできなかった。理由として、現地での活動により深く関わる時間が不足していたことが大きい。毎日の食事や気候、フィリピンでの生活に慣れるまで時間がかかり、調査先を探すのにも苦労したことが挙げられる。それでも、今回の調査を通じて得た経験は、卒業論文の考察に影響を与えただけでなく、個人的な視野を広げる大きな機会となった。都市農園が教育や公的機関と連携していることの意義や、住民参加を促すための課題を実感したことは、将来的な研究や実践へ活かしたい。

4. これから留学を考えている方へ

フィリピンは、費用を抑えて留学を考える方にとって魅力的な国に思う。物価が比較的安いため、生活費や学費を抑えながら海外での学びや経験を得ることができる。また、フィリピンは親日的な一面を持つ国でもある。日本語を学んでいる人やアニメに詳しい人、留学先として興味を持ってくれる人も多く、日本から来た留学生に温かく接する場面もある。現地の人々は温厚で親しみやすく、困ったときには気軽に助けを求めることができるなと感じる。フィリピンでの留学は、学費や生活費を抑えながら英語力を鍛えたり、異文化交流を深めたりする絶好の機会である。

5. 最後に

私は、大学四年次に交換留学に行く経験をしました。特に留学中に苦労したのは、卒業論文の執筆を並行して行うことです。ゼミでご指導いただいている先生が留学へ行くことを後押ししてくださったおかげで卒業論文に関しても相談しながらなんとか書き上げることができました。また国際交流室の鈴木さんや、米野先生からも手厚いサポートをいただいたことで無事に留学を終えることができました。保険加入や書類の提出、ビザ申請等さまざまなご支援ありがとうございました。

写真 1* リサール公園
写真 2** 大学にてウェルカムパーティ

フィリピン

フィリピン大学ディリマン校

国際関係学部国際関係学科３年

⑴ 総合的な感想

１学期間のフィリピン大学への留学を通して沢山の学びを得ることが出来た。日本と比較して生活は不便だが、日本にいての学生生活では経験できないことばかりで非常に良い刺激となった。特に学習面に関して、英語も完璧ではなくタガログ語に関しては何も分からない私がフィリピンで授業を受けることはとても難しかったが、困ったときに頼れる友達や教授と出会えたことで知識だけでなくコミュニケーション能力の向上も感じることができた。この留学生活の中で個人的に印象的だったのはストライキが起きて休校になったことだ。きっとこの経験は日本にいてはできなかったものだと思う。そしてフィリピンでは政権交代の転換期を迎えていて授業でもその議題が挙がるなどフィリピンの政治活動を肌で感じることもあり、いい経験ができた。また日本から出て、フィリピンの政治や経済・文化に触れることによって日本を見つめなおすきっかけにもなった。日本のインフラがここまで整備されるまでの道のりや国民性

の構築過程に興味を持つようになった。フィリピン大学への留学を通して、刺激的で学びの多い生活を送ることができた。

⑵ 派遣先大学について

フィリピン大学ディリマン校はフィリピンの中でトップレベルの大学であり授業の質は非

常に高い。生徒は勉強熱心で生徒主体で授業が展開される。教授も生徒も留学生に親切で、困ったことは質問すればわかるまで教えてくれた。特にタガログ語で話す生徒の発言は理解しきれないことがほとんどであったため、その部分はほかの生徒に助けてもらっていた。授業では英語とタガログ語の両方が使われていたため、英語しかわからない私にとっては難易度が非常に高かったがその度に助けてくれる生徒や教授の有難みを感じながら学業に専念することが出来た。UP ではひとつの授業が週に 2 回開講され、課題の頻度が高いと感じた。また課題の内容も重く、綿密な準備が必要。そのため授業内で分からなかったところはその都度質問することが重要だった。授業内でも授業外でもグループワークが多く取り入られていて、現地学生とのコミュニケーションが多く求められる。UP キャンパスについていうと、とても広大な土地で授業間の移動が大変だった。各棟の入り口にスタッフがいて治安は安心出来た。少し道を外れればスラム街のような治安の悪いエリアがあるが、基本的に行くことはないためそんなに気にしなくてもいいだろう。私は友人と興味本位で行ってみた。日本人は

お金持ちというイメージがあるのか物売りのターゲットにされやすいがフィリピンの雰囲気を味わえていい経験になったと個人的には思い出になっている。

⑶ 生活面について

留学生は UPIC とアカシアのふたつの寮から選んで生活をする。私はエアコン設備とお湯が出る点に魅力を感じて IC を選んだ。ただその分アカシアよりは家賃や光熱費が高い。IC は新しくできた寮のため比較的綺麗で、フィリピンなのに寮内で虫を見ることはなかった。IC のキッチンには電子レンジやウォーターサーバーがあり便利だった。食料の調達は寮の近くにあるスーパーででき、また A 2 という屋台が並ぶエリアで食べることもできるため特に困らなかった。フィリピンの物価は安く、A2 であれば 100 ペソあれば充分おいしいご飯をたべることができる。寮だけでなくフィリピン全体的にトイレットペーパーを流すことはできないし水道水も安心できない。

⑷ 後輩へのアドバイス

美味しいご飯を安く食べることが出来る A2 だが、そこで売られている果物や野菜は衛生的に安心できないため、食べないことをお勧めします。友人は A2 の果物を食べて体調を崩し、近くに病院はあるものの薬を手に入れるのに苦労し大変な目にあっていたため、自分の健康のために避けることがベストだと思います。フィリピンは日本ほど発展していないため最初は戸惑いを感じると思うが、とにかくフィリピンの人たち

は親切で面白いため、積極的にコミュニケーションをとることで語学力の向上も目指せるし、有意義で楽しい時間を過ごすことができると思います。

↑本場のハロハロ